

# 一休という多面体

その〈像〉と語り

## 『大徳寺夜話』における 一休の〈像〉

—大徳寺をめぐる人びと—

飯島 孝良

大徳寺に伝わるものとして、『大徳寺夜話』

(またの名を「眼裡砂」というものがある。

この「夜話」とは、『日本国語大辞典』によれば以下のようなものである——「①夜間に  
行なう談話。また、それを筆記した書籍。よ  
ばなし。②特に禅宗で、夜、住持が修行者に  
坐禅修行のために訓話すること。また、その  
訓話。③①から転じて)くだけた、肩の凝ら  
ない話。また、そのような内容の書物」。例  
えば『正法眼藏随聞記』には、「夜話に云く、  
真実内徳なふして人に貴びらるべからず」な  
どといい、上記②の用法がみられる。或いは  
上記③の例として覚範慧洪(一〇七一〜一一  
二八)の『冷齋夜話』があり、これは北宋当  
時に活躍した詩人・文人の逸話やその作品へ  
の評論を集めたもので、特に五山文学へ大き  
く影響した。

『大徳寺夜話』は大徳寺主流派である養叟  
側の視点から記述されたものであり、養叟一

派のなかで語り伝えられた一休への批判がみえる。例えば「養叟云、一休ノ風顛漢ヲバ嫌ハズ、師家ノ古則ヲ問ハズニ推著テ心得頼ヲスルヲ嫌フタ也」〔注二〕として、養叟は一休が古則（公案）に充分打ち込まずに師家ぶるさまは批判するが、一休の風狂そのものは嫌っているわけではないと記されている。この背景として、当時の宗派内という参禅において、「公案拔庭」（公案に関するコメント）を師が弟子に秘伝として与え、それに報酬が求められることがみられた点が関わる。このような指導方法は「密参」といわれ、長禄三年「一四五九」から寛正三年「一四六二」の相国寺における講録である『勅修百丈清規雲桃抄』巻二（住持章・交割砧基什物の条）などに批判的に報告されるとともに、一休も『自戒集』などで都市民に公案禅を易々と授けて見返りを得る養叟一派を批判している。だが、『大徳寺夜話』の視点からすれば、大

徳寺主流派にはそのような指導で人びとを集め、伽藍を如何に建て直すかという課題があったとみえる。法を嗣ぐという点でいえば、ひとつの寺院や塔頭を相続することで法系を示す「伽藍法系」と、師から弟子へ人格を通して相承される法系である「印証系」（「人法」というふたつが考えられる。「伽藍法」は入寺式において嗣法香を焚くという儀式などを以て公に宣言されるが、「印証系」は自己宣言であつたり私的な密伝であつたり後代に語られることもある〔注三〕。こうしたとき、一休当時の大徳寺の再建や密参の位置づけは、自らにつながる法系をどう意識しどう残し得るかを問うものともみえる。

京都市中を灰燼に帰した応仁の乱を経て、てつとうぎこう 徹翁義亨（一二九五〜一三六九）の門下と関かん山さん慧えい玄げん（一二七七〜一三六一）の門下とは、共に大燈の法系にある者としてどちらも大徳寺の住持を出し、多くの奉加銭を納めるなど

して大徳寺の復興に関わった【注三】。こうしたなか、『一休和尚年譜』文安元年〔一四四四〕や実伝宗真撰『養叟和尚行実』などには、大徳寺の住持に日峰宗舜（にっぽうそうしゆん）八）などの関山派が入ってくることを養叟や一休ら徹翁派が警戒し、日峰の大徳寺入山を妨げようと画策する様子も伝えられる。こうしたことには、大応や大燈の法系について、一休とその兄弟弟子とのあいだのみならず、徹翁派と関山派とのあいだでもどう意識されていたのかが問われてくる。大徳寺は徹翁派が主となり、関山派は特に妙心寺を拡大させることとなるが、大燈を開山とする大徳寺の再建を両派がどのように捉えていたのかは、一休当時には重要な問題であった。

『大徳寺夜話』などにみえる一休と兄弟弟子・養叟との対立や、徹翁派と関山派の関係を考えるに、戦乱に揺さぶられる時代のさなかで大徳寺の維持や復興をどうすべきか、或いは

参禅を通してどのように人から人へ法が嗣がれるか、そうしたふたつが複雑に関係しながら大応・大燈以下の法系が形成されていったと考えられる。

【注一】原文は、飯塚大展「龍谷大学図書館蔵『大徳寺夜話』をめぐる(一) — 資料編 —」(『駒澤大学禅研究所年報』第十号)による。

【注二】能仁晃道「伽藍法と印証系という二つの法系について」(『清骨の人 古月禅材 — その年譜から近世禅宗史を読む —』禅文化研究所、二〇〇七年)なども参照。

【注三】「官錢奉加諸納下帳」(東京大学史料編纂所編『大日本古文書 真珠庵文書』第一巻、東京大学出版会、一九八九年、一五八頁)などを参照。

飯島 孝良 (いいじまたかよし)

花園大学国際禅学研究所専任講師。専攻は禅文化史・日本宗教思想史。主な著作に、『語られ続ける一休像 — 戦後思想史からみる禅文化の諸相』(ベリかん社) ほか。